

## 菩提心の呪術性

田 上 太 秀

### 一

菩提心 (bodhicitta) の語は原始仏教文献や大乘仏教以前の部派仏教文献にはなかった大乘仏教特有の用語であったと考えられる。

菩提心の語は一般に阿耨多羅三藐三菩提心の略語形だといわれるが、そうではなく菩提心の語は大乘教徒の新造語だといえる。もし、この語がたとえば原始仏教時代にあったとすれば、文献中に記述されているはずである。また部派の大乘以前の文献中にも頻繁に出て来るはずである。婆沙論に見る菩提心の語は明らかに大乘仏教の影響を受けているので、部派仏教の中にあつたとは言い難い。

大乘仏教の初期の諸經典を見ると、菩提心と阿耨多羅三藐菩提心とが併用され、しかも、後者の略語形として、前者が用いられているところは一つとしてない。とにかく諸經典は菩提心を一つの大乗術語として重く用いている点があはつき

りと窺える。そこで原始仏教文献に菩提心の語が存在していたとすれば、大乘の諸經典の例のように発阿耨多羅三藐三菩提心と共に多用されてしかるべきはずであるのに、その例が一つとしてない。また部派の文献でも同じである。かくして、菩提心の語は、大乘教徒の新造語と考えることが妥当だと考える。この論証はすでに一・二の論文で発表しているが、いずれ結論を出すつもりである。

菩提心の語は大乘仏教特有の用語であることが仮りに認められたとして、この語は初期大乘經典の中ではすべての經典に記述されているのであろうか。調べてみると、菩薩行を記述する經典の中でも必ずしも菩提心の語がみられるとは限らない。学者によれば、菩提心を説く系統の經典群と、説かない系統の經典群とに分け、阿弥陀仏信仰系統の經典は菩提心を説かないといひ、阿闍世仏信仰系統の經典は菩提心を説くといひ、これは当然ないと考える。

大乘の初期經典とされる無量寿經をみると菩提心の単語が

一回だけ用いられている。その一回が經典の中心思想を表わす四十八願の中で第三十五願中に出ている。このことは經典作者が菩提心の用語を知っていたという証拠である。その用語は一つだけであるが、発阿耨多羅三藐三菩提心の表現文は多出している。これだけをみてもこの經典が菩提心を説かなかつたということにはならない。

般若經典群は菩提心を説く系統といわれるが、金剛般若經は例外である。この經典には発阿耨多羅三藐三菩提心の表現文も、菩提心の単語さえない。あるのは「菩薩乘 (bodhi-sattva-yana) へ進趣する」という表現があるだけである。この經典作者は伝統的な表現の発阿耨多羅三藐三菩提心も、また大乘教徒の新造語といえる菩提心の単語も用いていない。ということとは、伝統を越えていると同時に大乘のもつとも原初形態を示す思想ではないかと考える。この意味でこの經典はかなり古い成立の大乘經典と考えてよいだろう。

菩提心が現われていないといわれる初期經典に菩薩心・菩薩意という漢訳語が目立つ。とくに古訳時代の經典に著しい。実はこの漢訳語の原語は多くは菩提心であったと考えられる。とくに支謙訳を原典と対照してみると、このことがはっきりと分かる。また支謙や竺法護にも、また旧訳時代になつてもとくに羅什訳にもみられる。菩提心の語が古訳時代の翻訳者には菩薩心と理解されたらしい。それというのも原始

菩提心の呪術性 (田上)

仏教以来、どの文献にも菩薩心 bodhisattva-citta という用語は一つもなく、これからみて菩薩心・菩薩意の原語が本来なかつたといえる。従つて古訳時代のその訳語の原本には *bo-dhisattva-citta* はなかつたと考えられる。かくして支謙訳その他古訳時代の翻訳者の手になる經典中の菩薩心・菩薩意の原語は菩提心 (bodhicitta) であったといえよう。

このようにみると、初期の經典には菩提心の単語は頻繁に記述され、すでに作者たちには馴じみの定着語であつたと考えられる。

## 二

この菩提心は大乘教徒にとってどんな意味をもつ用語であつたか。

宗教学では呪術とは何かある目的のために超自然的存在あるいは呪力の助けを借り、種々の現象を起させようとする行為及び、それに関する信仰体系ともいわれ、端的に靈的存在によつて望ましいことを生起させようとするものをいう。

この呪術の機能からいえば、大乘仏教の菩提心は呪力をもつ語として大乘教徒によつて考えられた。

阿弥陀仏信仰ははっきりといつて祈りの信仰である。阿弥陀仏の本願力にすがつて浄土へ往生を願う信仰である。そこには本願力が大きな力をもつて居り、それに対する信仰であ

り、自力というより他力の信仰である。この祈りの信仰には、勿論発阿耨多羅三藐三菩提心の行為があることは言うまでもないのであるから、先述のようにその表現文は多出している。しかし無量寿経では菩提心の語がただ一回だけしか用いられていないのはなぜか。

それは菩提心の語がある呪術性をもった用語と考えられていて、それを生起することで往生するのは、本願力にすぎるといふ阿弥陀仏信仰に反する意味にとられるからではなかったかと推測する。本願力にすぎると祈りには、大きな呪力をもつ菩提心は必要ではなかった。かえってその信仰に背く行為であったといわなければならぬだろう。それは菩提心は一つの呪力をもつ心と考えられていたからであろう。

### 三

菩提心がなぜ単語として独立したのか。それについては心性本浄説を考えなければならぬ。原始仏教以来、さとりを求めるための発心は漢訳では発阿耨多羅三藐三菩提心と表現されて来た。これは文である。つまり誰々が無上の正しいさとりに向けて心を生起するというのが原文の意味である。この文の中でさとりに向う心とは一体何かを考えた。それまで仏のさとりを求めるなど考えられなかった部派仏教の教理では、その心の問題にすることはなかった。ところが大乘教徒

は仏のさとりを求める教理を説いた。阿羅漢を超越する仏のさとりが求められなければならない。と同時にそれを求めても得られるという思想であった。その仏のさとりを求めるために生起される心が問題となる。大乘教徒は、心性は本来清浄と説き、本来清浄という点において仏と同じと考えた。この心性本浄の自覚にもとづいて、はじめて仏のさとりを求め仏のさとりを得ることができるといふ思想が打ち出された。その心性本浄の故に発阿耨多羅三藐三菩提心は可能となった。

その心を大乘教徒は菩提心と命名したと考える。それはかの文の略語形ではなく、純粹にさとりにへの心、そのものを菩提心と呼称したといわなければならない。ここに誕生した菩提心は大乘教徒によって、いろいろと意味づけられるようになった。

大乘仏教になり頻繁に出てくる術語に陀羅尼がある。これはそれまでの仏教にはなかった大乘特有のものである。陀羅尼(Sutra)は総持ともいい、後期大乘仏教では呪文の意味に用いられるようになった。大智度論の説明では、種々の善法を集め、能く持つて散佚させないこと、つまり善法を多く保持して、悪法を制遮する力を陀羅尼と考えていた。とくに教説を記憶し忘失しないことが陀羅尼の大きな特色である。

この陀羅尼思想が菩提心と密接な関係をもつようになった

のも大乘仏教の特色の一つとも考えられる。

#### 四

仏伝文学の一つ、マハーヴァスツには菩提心の語は後半に二回出ており、これはこの文献でも新しい成立の層に入るわけだが、ここでは菩提心をつねに捨てないという表現に徹している。これは菩提心が一つの陀羅尼の用語として考えられる原初形をみるが、この形式は大乘經典の中ではありふれた表現で、忘失しない、捨棄しないなど数え切れない。この文献では最初心 (prathamāṅga) が常用され、これを菩提心の代名詞と考えている。これについていえば、この心を生起すれば、ちょうど鹿の群れが大きな岩石の陰に隠れると、その群の姿は消えてしまうように、その人の過去の罪業はまったく消滅するという記述の個所がある。この考えは大乘經典の金剛般若経にも見られる。

過去の罪業消滅という記述は、最初心の菩提心を呪力をもった心とする意味が込められていることが知られる。この思想は大乘經典の中には数多く見ることができるといえる。

「一切」という形容詞を付して無量、無数、無辺、無尽の意味をもたせ、これを円満成就することが大乘菩薩の修行であるわけだが、菩提心のはたらきもその一つである。

十地経の嘱累品では菩提心を大地に喩え大地より流出する

善根は一切衆生を潤し救済し、一切智の大海(仏界)を現出すると述べる。菩提心はまさに無尽蔵庫であり、一切の功德を総持している。一種の陀羅尼である。

また本品には仏十力と等しい菩提心、一切智の菩提心、三世利益を成就する菩提心、諸煩惱を除く菩提心など、菩提心のはたらきを列記する。さらに菩提心をもって布施するものは三世の自在者となるともいう。

また大集経無意菩薩品には菩提心の無尽威力を述べ、菩提心を虚空にたとえている。さらに無尽なる仏の戒定慧解脱内容を含する菩提心というわけである。さらに仏の十力四無畏十八不共法によっても菩提心は生起するともいう。

大方便仏報恩経発菩提心品には、菩提心は撰取一切善法根本と述べている。この一切善法の根本を内に秘めているという思想は大乘經典に共通して述べるところである。一切という形容詞を付して、諸仏や善法が出生したり、煩惱を除滅したり、悪法を遠離したり、仏法を完成したり出来る呪力を有するのが菩提心と考えた。

この菩提心の呪力を列挙し、菩提心を分析した記述が初期から中期のいくつかの大乘經典に現われている。

まず入法界品の菩提心の一一八相がそれである。これは「菩提心は種子のようだ。よく一切の諸仏法を生ずる故に。」

からはじまり「菩提心は仏支提のようだ。一切世間の供養に  
 応ずる故に。」で終る菩提心の説明である。ここに見る譬喩  
 例とその説明は一切の諸仏菩薩・善知識を出生し、種々の無  
 量の善根を内蔵し、それらを成長させ、一切の悪を断尽し、  
 一切衆生を養護し利益し、さとりへの道標となり案内者とな  
 るというまさに全智全能を持した陀羅尼として菩提心を詠っ  
 ている。

二万五千頌般若では菩提心の二十二相が記述されている。  
 これは十波羅蜜を軸にした菩提心の説明で、ここにも各々譬  
 喩が付説されている。一つ一つの説明ではかなり広範囲の教  
 理・実践が述べられており、それらが菩提心に付属すると  
 か、菩提心により成就するとかの説明がある。就中、第十九  
 相のところは、菩提心は陀羅尼の顯現に通じており、泉のよ  
 うだとある。これは十二部経を修習したい、心に止めたい、  
 説法したいという誓願が述べられ、真如性を了解し、他人へ  
 の説法を願う菩提心の陀羅尼誓願が強調されている。

宝女所問経巻第二には菩提心の三十二相が記述されてい  
 る。ここには六波羅蜜の成就や諸魔の除去、生死苦からの離  
 脱、諸煩惱に悩む衆生の救護、十方諸仏の教説の具足、諸神  
 通の具足など多彩な誓願を成就するための菩提心が述べられ  
 ている。菩提心を寶石に喩えこれは仏道宝であり菩薩宝であ  
 るといい、これより一切の諸宝を出生すると結んでいる。

大乘本生心地観経発菩提心品では、仏が文殊師利菩薩に教  
 えて、

大善男子よ、我れ衆生の為めにすでに心地を説けり。また、まさ  
 に發菩提心大陀羅尼を説き、諸有（情）をして阿耨多羅三藐三菩  
 提へ心を發さしめて、速やかに妙果を円かにすべし。

と述べている。ここでは菩提心が陀羅尼として取り扱われて  
 いる。このあとには陀羅尼三昧を「菩薩觀菩提心成仏三昧」  
 と名付けている。これを見るだけでも、のちに菩提心は陀羅  
 尼そのものとして考えられたことが知られる。

大虚空藏菩薩所問経には、菩提心の内容を一二八項に細分  
 析して、一つの体系的説明をした。いままでは譬喩をもって  
 菩提心の特相を羅列したに止まっていたが、この経典にはま  
 ず、菩提心を淳至と畢竟とに分け、さらにそれぞれを分析し  
 て、合計一二八項に亘る徳相を述べている。おそらくこれほ  
 ど細分して菩提心を分化したものは前後になく、菩提心が一  
 切教理実践の頂点に位置されている。

以上初期中期の諸経典を見る限り、大乘教徒は当初から菩  
 提心の語に一つの呪力をもたせ、陀羅尼としてそれを考え、  
 それを発起し維持する功徳を高く詠ったといえる。それが菩  
 提心を忘失するな、菩提心を磨けの教訓を生んだのである。

（註略）。

（駒沢大学助教授）